KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Inches
Centimetres

赤2
5593
2

門示2 號5593 卷2
下.2 69
二八十五 函 歌 号 號 函

詞八衢下卷

多行之圖

并受てにをはの図

四段の活	中二段活	下二段活
打ウツ 待マツ	落オツル 閉トヅル	捨スツル 撫ナヅル
た まんぬじでぞ	ち まんぬじでぞ	て まんぬじでぞ
ち しるんけうて ちりぬるなばきて	ち しるんけうて ちりぬるなばきて	ち しるんけうて ちりぬるなばきて
つ ととらしごきんめり	つ ととらしごきんめり	つ ととらしごきんめり
る よりをふまでかな	る よりをふまでかな	る よりをふまでかな
て どもだ	れ どもだ	れ どもだ

○此行ハそ一段の活用なし

四段の活詞

自 ほのつ 頒 ヨかつ 同意　自 ほやまつ 過　自 うつ 打　自 うがつ 穿

自 かつ 勝　かくつ 託　こぐつ　けつ 消

こぼつ 壞　こもれ 同意　まぐつ 巣 立　鳥をとり 巣をたつこと　そぐつ 音　たつ 立

たつ 断　たもつ 保　たなつ 放　。えつ 同中二段も活きて同意なり

えぐつ 日 立　えもめぐつ 揺 言　まつ 待　まつめぐつ 政

○えつ 自下二段ハ他 満　えもつ 持　ひらかつ 分 物ヲ二ツニスルヿ

えつハ俗ニ ビシヨヽニ濡ルるゞ ビシヨヽと同し 同ありたの同中二段も活きて同意の同なり但し四段の方ハ古く中二段の方ハ新しとなるべし又本云のこゝろ ずすべて四段と中二段と両方ともとらく詞ハこゝろ同意なり又四段と下二段とハ必ず別なる意とすべし

○えつ 古今集 箋ハ わの衣を此えつをから取ん 六帖五ノ袖

えつもでに 後撰集 意ノそでのこゝぞひつ 金葉集 春ハ池ノ

ひれ 松の云々などあり 此詞も此行の中二段なれども活きて

お取しこゝろなるべし 此俗ちかれこれかまつなり

○みつ 古今集ノ汐こゝぞ入ぬるいその 後撰集ハ汐みぬ

ルヤウノ事 アル上ニヤ 和みむめ 音ノカブリタル 言ハタタク物ノ集ヲ形容スル言トケルナリ

あとまけかや 於造集 意ノ汐こゝるなどにわかふ又こゝつ 後拾遺集 各ハ 和ハ 音ヲ發スルニ 脣ヲ合スル

後拾遺集 各ハ 和こゝつ 志ハに 今 和 物語 藤原君の巻ハ 称

がひみがしやハと云々 又吹上巻ノ秋こゝろんとて云々 又同巻の

哥ノ志ハのこゝつ 源氏物語 真木柱ノ むねのこゝつこゝちし

て云々 冊後守為忠家百そに盛忠いりなれバこゝるぬこゝよひ

自新の云々などにいとおほしけてかく多く出せるハ此詞

中二段ノ こゝち こゝつ こゝる こゝつれともはまゝく如く思ハるゝ

にしの活きたる一ツもあるべし 此ハ 此ハ

壬生品集 宝物集ナドニハヨリ中二段ニ活シタルヤウナルアレ其ハ後人ノ写シ誤リタルナルベシ

○やちまゝ下

中二段の活詞

此部類も俗言のよく例あり

○いふつる　日　おつる　落

○ちつづる　談

○ゐつる　四段同

○いふつる　古事記上巻ゐ啼伊佐知伎ゑく又下に哭伊佐知流

黒河先生曰く哭言古事記ゐ伊佐知伎と云所一ヶ所伊佐知流と云所二ヶ所あり平假名書ハ誤字と知なり　都　草書　次の荒開院　なども轉寫

○いふつる　古事記上巻ゐ啼伊佐知伎ゑく又下に哭伊佐知流

黒河先生曰く哭言古事記ゐ伊佐知伎と云所一ヶ所伊佐知流と云所二ヶ所あり平假名書ハ誤字と知なり　都　草書　次の荒開院　なども轉寫

○おつる　懼　ふつるハ　おくの　同じ　行

○ちつづる　問　のたまふ　考ふ　非

○ゐつる　ようづる　夢　又

○ちつづる　日本紀孝徳巻ゑ譖倉山田大臣於皇太子白ゑく　續　讒言　ちの字の訓のり

日本紀宣命ゐ譖治ゑく　字鏡ゐ譖ハ譏也　志己豆ともあり

志巳豆ともあり　ふて加

どゝも訓のさまざまなり

○そゝづる　堀河百首ゑ雑ゑ被そゝぐ　拾遺集恋ゑはらはそゝぐ　異同　同じ

○ゐたる　拾遺集恋ゑはらはそゝぐふひらぬ山川の順集　遺

よかめしてぶらうまでひつる秋ゆ急 蜻蛉日記に袖ひつる時を
ぎにてこそなのぶきしか 源氏総角にかく袖ひつるなのと 堀河二
帝に袖ひつるも此詞四段にも活きて同じ意なり
○もみづる 万葉十に山の将黄變 古今集冬にはひにもみぢぬ松
後世赤キ絹ヲもミト云ヘバ赤キモノヲ云ヘバ中ニ段ニノミ用ヰタリ 萬葉ニハスベテ四段ニノミ用ヰテ書タル所ハ三ナ四段ナリ
もるゝ来れ 新古今冬にとからし此にもみぢてなど狂あり
故ニ訓ノ所モミナ四段ニ訓ムベシ
○をぢる 出雲國造神賀詞に弥乎知尓御袁知坐云々 万葉
集十七にしらぬなのれル乎知母かやはき同廿にゆゑ花ちるない
や乎知尓さけ事 後の哥に郭云にをちかへり 能いへるも
これなめ仕て加くはしありて つ つる つれといまることゝあ
たらざれども此活ふはべし

下二段の活詞

此活るを俗言にそてるといふ例なり

あ 他 ぢる あたるの他なり ○あ あつる いぢる 自 出 ○う 乗 ぢる 自 ○う 乗 ぢる
かなづる 舞 くそぶつる 企 そつる 乗 そぶつる
たつる 立 なづる 形状言なり 乗 ひいづる 出 ぺぶつる 隔
まうづる 真居出 ○ゆぢる 古の言のつるハ形状言なり
○あるつる 字鏡に惶急阿和豆とあり 阿和豆といへるハ多し
○う活る 古事記上巻にぬぎ宇豆又乗をうつるとよめる後
○ゆづる 字鏡に煤ハ以菜ヲ入湯ニ云々奈由豆とあり 又菜花物語
本事巻に古風にやとてゆでさせぬひて云々など狂あり
○古事記上巻に此ゆゑ志で 又古今集春に白雲の花ゆき

ふれにてもやはたてすし　土佐日記に　あをとひてくさむけれも
志らぬ又かくし川袖をぬ　ひてくも云く　夫木集に野川のあり
枝ひてくし此外みてくなどいくる志でハ志ごくしせ　ゆくすゑ
ゆくしく　志てハ　志ごかし　みてハ　みしせを　給ふていくるの
こゝてつつる　つれなど　活ものはれてこ　此もちみさき　詞也
ゆくまきふ能ゆけこと上りもいつりこのうち　みてハ此活にて
青はこゝ志こつるたのもれさなへ云くなどこつるともなれば
これ活用ともおもはれまてあらしぶしし

黒河先生自ラスベテ奈行ノ音ハ物ノヤハラカニナルナニ用ヰル祢ヲ祢ヲヌルテトノタグヒ

黒河先生曰奈行変格ハ中四段ヨリ出タルモノ也其後ハ如羽ぬ祢ト活キテ祢ヲ希求トスルニテ知ルベシ

奈行之圖

并受るてにをはの図

変格の活		一段の活		下二段ノ活	
往イヌル 死シヌル		似ニル 煮ニル		兼カヌル 束ツヌル	
な		ふ		祢	
まんぬじでぞ		まんぬじでぞ		まんぬじでぞ	
ふ		ふ		ふ	
しるんなばきて	しるんなばきて	しるんなばきて	しるんなばきて	しるんなばきて	しるんなばきて
ちらぬる	ちらぬる	ちらぬる	ちらぬる	ちらぬる	ちらぬる
ぬ		奈		ぬ	
ときもらしべきめり	ときもらしべきめり	ときもらしべきめり	ときもらしべきめり	ときもらしべきめり	ときもらしべきめり
ぬる				ぬる	
をよりまでかな	をよりまでかな	をよりまでかな		をよりまでかな	
祢ぬ		ぬ		ぬ	
どもぐだ	どもぐだ	どもぐだ		どもぐだ	

○此行ハ其四段の活中二段の活なし

○変格の活詞は図の上に記せる往死の詞二ツのこなり活ざりは大但四段の活れごとくにて切るゝとつゞくとれ詞二ツにはられこれの結び二ツあり下知の詞は祢とはかたし

一段の活詞

自 小ぶ 似

小ヲ一ノ音ニ轉シ又左行四段ニ轉シテ為ル 自然言也 古事記ノ 煮

下二段の活詞

此ぬるを俗言にハ祢るといふ例なり

かぬる 兼

かさぬる 重

○かぐぬる 有上ヘ物ヲツフル

○たがぬる

他 たらぬる 豐

他 たぢぬる 尋

他 ぬる 東

○ぬる 局

他 ぬる 連

ぬる 寝 コノ言ヅコヽノ奈行下二段詞ノ本ナル

○ぬる 他 刎

○ふさぬる 總

他 ゆぐぬる 委

○ぬる 縮

○かぐぬる 万葉十八に此しはうちの許登可多祢もちとあり

かぐぬるハ物ノアル上ヘ又物ヲツフル意ノ同也

○たがぬる 万葉五にたつかたえてに多何祢提とよみたり

○たらぬる 万葉十五にきくらのゆくさもれなのかぐるなり

多多祢云々といへり

○ぬる 蜻蛉日記にあのがきくひきたぢぬなどしつゝ云々といへり

○たぬる 古事記下巻に須岐婆奴流母能 まくて万葉集二に奥津かいはくなる波祢そ邊津かいはくなれたねそとあり

○ふさぬる 日本紀用明巻に摠攝万機をよろぢのよみ

○やちまつ下

ぼごとをふさねかたりてとよみたり　続日本紀宣命に萬
政摂以をよく諸づのすつめことをふさねもちて少くよみたり
散木寄歌集釈教の奇れたし書に大かたふさまてかの函
しへ用ることをなどあり
○ゆごぬる日本紀に付をゆごぬとよめり
ゆくこのゆくこ同じ　ゆるのたゆくナドノゆくこ同ジ　後ニハ意情ヨリ起ルナヲ油断トモフナ出タリ
牛コノ詞ヨリ出タルナレ其意味ハ大ニ違ヘリ
○わがぬる大和物語にかいたがまてはくみたり又枕草紙
蘇之添言也　かまてニハ非ズ
ゆごぬるかまてはらん云々などいへり

波行之圖

并受るてにをはの図

四段の活	一段の活	中二段活	下二段活
逢(アフ)問(トフ)	干(ヒル)噴(ヒル)	戀(コフル)侘(ワブル)	加(クハフル)辨(ワキマフル)
は	ひ	ひ	へ
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ
ひ			
しるんりて	しるんりて	しるんりて	しるんりて
ぬるなきて	ぬるなきて	ぬるなきて	ぬるなきて
ふ	ひる	ふ	ふ
ととらべきらめり	ととらべきらめり	ととらべきらめり	ととらべきらめり
		雪(ヒ)	雪(ヘ)
ようをふまでかな	ようをふまでかな	ようをふまでかな	ようをふまでかな
へ	ひれ	ぬれ	ぬれ
どもぬぐだ	どもぬぐだ	どもぬぐだ	どもぬぐだ

四段の活詞

あふ　○あがふ　あきなふ　○あざなふ

あげつらふ　○あざあらふ　あそぶ　○あふ

○あらそふ　あがのふ　○あらもふ　○あなふ

あへしらふ　○あまなふ　あつらふ　あつかふ

あらそふ　いふ　いとふ　○いとのふ

○いさかふ　いざなふ　いさよふ　いとふ

いはふ　いそふ　うかぶ　うかぶ

○うけふ　うしなふ　うたふ　うつかふ

○うらなふ　うつろふ　うぞふ　○うるふ

うべなふ　うやまふ　えらぶ　○おふ

おふ　おそなふ　おそふ　おとなふ

おもふ　おもふ　おぼふ　かふ

かふ　○かぶふ　かゞらふ　かよふ

○かふ　○かぞふ　かよふ　○かふ

かなふ　かよふ　きそふ　きらふ

きらふ　くふ　くふ　くらふ

○くるふ　○くまらふ　○こふ　さかふ

さけぶ　さまらふ　さそふ　さまよふ

○さけぶ　○さらがふ　○さまよふ　そよぐ

しつらふ　しをらふ　○しなふ　しのぶ
○しらがふ　すふ　すくふ　すゞまふ
すさまふ　そふ　そこなふ　そばふ
○たぶ　たがふ　たぐふ　○たゆたふ
たかふ　たゞよふ　たまふ　たぐらふ
たゆたふ　たらふ　ちよふ　ちかふ
ちかがふ　つかふ　つのふ　つきまとふ
つくめふ　つくろふ　○つくふ　つどふ
つくなふ　○てらふ　とふ　とぶ
とゞのふ　とものふ　とかなふ　○なずらふ

なぞらふ　なやふ　ならぶ　にぎはふ
になふ　にほふ　○によふ　ぬふ
ねがふ　○ねぎらふ　ねらふ　のぶ
のたまふ　○のろふ　はふ　はからふ
はこぶ　はぶろふ　はらふ　はらだふ
ひこづらふ　ひろふ　ふまふ　○ふれだふ
○ふるまふ　ふるまふ　へつらふ　まふ
まがふ　まかなふ　まじはふ　まじらふ
まつらふ　まどふ　まどふ　まねぶ
まひなふ　まよふ　まろふ　○まへなふ

むかふ　むまくぶ　むせぶ　○もくよふ
○もとふ　○もらふ　やしなふ　やはらふ
○やとふ　やうふ　ゆふ　○ゆるぶ
よぶ　よそふ　よぞふ　○よろふ
よろこぶ　○よろがふ　よぐふ　よろふ
ゐやすもふ　ゑふ　ゑらふ

○阿ゲふ　万葉集十七に安賀布（アガフ）いのちゝも　字鏡に安賀布（アガフ）
なぶらあり　今の阿がるふト云フ詞ト同ジ但シあがるふノ方ハ物ニ見エタルハ三百年バカリヨリコナタ也
○阿ぎとふ　古事記中巻に始爲阿藝登比（ハシメテアギトヒシタニヒキ）　蜻蛉日記
あ風かまくとたぐてをかきおもてをそこらの人のゐぎとふ

やうにまうしぞ云くなどあり　コノ詞ニツノ意アリ一ツハ吾君問ニテ幼キ兒ノ母ヲ呼ブ今ノカヽナドイフ詞ヨリ出デ其口語ノ形状ヲ
△ヨリ出ヅ云ハ魚ノ鰓ノ鰓ノ上水ヲ呑ムヲ云フ是何レモ鰓アギトヲ動カス形状ヨリ出タル也
○阿ゑふ　日本紀神代巻にあゑはぬかもふとあり
○阿ゑなふ　日本紀神代巻に奸賊（アタナフ）とあ案
○阿とまふ　万葉二に御軍乎安騰毛比賜（アトモヒ）　又九に阿騰母比（アトモヒ）
とてくなどぞあり
○阿なくふ　続日本紀宣命に阿奈奈比（アナヽヒ）奉とあり
○阿ゆまふ　日本紀仁徳巻舒明巻に不和をゆまなはぐ
○コノ阿ハ甘ニ和ノ阿ニ同ジ
よそめ又應神巻に欲和をあまなくたゝもんとぞとよめりか
してさて此行下二段の活れ格なり
○いぐれふ　古事記中巻にえくしやこしやこハ伊碁能布（イゴノフ）ぞ

○やちまゝ下

○十

とあるを

○いきのふ　大和物語にいきかふなめ　落穴注もおかしめり
いはりひてなどあり

○うけふ　古事記上巻に宇気布（ウケフ）ときに　伊勢物語に注ことも
もなき人をうけへぞなどあり

○うぢなふ　万葉十八に神あひ宇豆奈比（ウヅナヒ）　続日本紀宣命
○コノ[illegible]ハ[illegible]ニヤ
に相宇豆奈比（ウヅナヒ）奉などあり

○うはふ　拾遺集うるひ[illegible]と　丹後守為忠家百そに
忠盛こまの衣のうるひぬるかなあり

○かぐふ　万葉九に加賀布（カバプ）嬥歌（カバヒ）と訓め
カブイ〜ガヤ〜ト云フ声ヨリ出テバ男女ノ狂ヒタハムレアツブフノ声トナル

○かしふ　金葉集雑にかしふ垣柴の好忠集にかしもねど蓮
○墩ト云フ言ニフノ形状ヲツケテソノサマヲ云フ[illegible]ニシタルナルベシ
のまぐき　堀河百そ雑にかしひなき柴の庵　丹後守為忠
家百そに仲正かしひてさけるかきつはこそもなどあり

○かそふ　古事記中巻掠取其母王（カソヒトリテソノハハノミコヲモ）　続日本紀宣命に高御
物ノアマタアル中ヨリ一ツヲトルコトロ
座次乎加蘇毘奪まして皇位乎掠天などあり又日本紀継體巻
に捉をかそひとしもよめり

○かぐふ　万葉十八に[illegible]と加多波牟（カタハム）かも　後撰集春に山風の
物ヲソト持テクル意
花の香かぐふ[illegible]なとあり

○こるふ　万葉四に久流比（クルヒ）に久流比（クルニ）おもひゆるかもとよめり
[illegible]ト云フルト云フ[illegible]ニフノ形状ノソハリタルナラン

○こうぶ　日本紀神代巻に発稜威之嘖譲（コロビヲ）又神武紀に詰嘖（タケビコロビテ）之
人ヲ[illegible]コハカヲ入レテ事ヲマルニ用ヰル声ナリ

○せちまこ下

又万葉十一にもとに所嘖（コロバエ）物思ふわれを又十四に稱まへこの恵に
はしに許呂波要（コロバエ）なども行りはて此詞中二段の活りともおもはれ
ぬまでも志のこれを見てまべて中二段の活詞の其第一の音
より良行の下二段の活にこゝろはれなどいふ例なしかくいふ
もこゝろな四段の活よりなれば所りこゝろだえハこゝろばれなめ
○さらにふ　大稜詞に佐須良比（サスラヒ）うしなひてん　源氏物かたり
大イナル物ヲ小サクスルヿヨリ出タル語也　サスノ二音ハ　サヽヤカノ　サヽナド、同語ト思ハル
総角にあるまじきはまにさすらふたぐひ　金葉集恋
ゆれさまそこひてりどあり此詞この行の下二段の活にもいひて
おもしきこゝろとまゝ
○さらぐふ　源氏明志におとなひさらぐひ　散木寄歌集に
コノ　サハ　サスラフノ　サニ同じ

山陰にやせはらぐへるいぬさらおひたなれてひく人もなし
○しぐまふ　古事記下巻に匍匐（ハヒシヾヒテ）進赴云々　続日本紀宣命に
シヾヒ　シヾヒ　シヾヒ　シヾヒ
進退（シヾヒ）たらひなどあり
○しなふ　万葉三にまきのたれ之奈布（シナフ）せの山まくに十三に喜山
乃四名比（シナヒ）はりえて又二十にしち之奈布（シナフ）きみかまがうと又
好忠集に尾羽ぞしなへるなど見えたり又也行の下二段の
活に志なゆ　志なゆる　志なゆまし　志なゆえといふ詞ありこれ
これ詞と今ハ同じ意ときこゝろかどかく行も活も異にて同
志なる例なれば異なるもあるにやこゝ活いでにおどろ
かしおくのこゝろなめ

○志らがふ　源氏竹川巻に見えたるしかひまゝ徳角巻に
見えたるしかふなどもあり
○たぶ　続日本紀宣命に多婆受（タバズ）とあり又後にたらびたらべ
などいへるハたらび　たらべを書紙にいへるなり
○たくはふ　万葉十九に多久波比（タクハヒ）おきてとあり此て外に活
きしることゝえくざれバ中二段の活をしてしかに定めかたけれど
こゝれたゞきのはゞに似たれバ先こゝに出せり又おもふに
此詞若に用ふる下二段の活とそんなしことゝきたゝゆまつバ
たくたへといふべきを第二の音にうつして右のことくいへるにて
うれへを　うまひ　ひぢたへを　ひぢハひ　ことへを　ことひ

おしなべを　おしなべなどいへるも此例にやなれこの中二段
の活のうまふるといふ詞のところにいへることあり考へあハ
べし　あぢたひ　ことひ　おしなみなどもまれてにあるのを
にて此外四段の活きばまにいへる例なし
○はらふ　公忠集によりに頼たへるこれ外のとあり
○てらふ　日本紀哥に山のへ乃こ志まこゆ志に人涅羅賦（テラフ）るも
やつげハをもしたくもなし又字鏡にてらはそともあり
○なぞらふ　後撰集春にはなぞらへる　源氏さわらびの
巻になぞらふ人世にありなむや又をとつくしになぞらハぎらん
又行幸になぞらひてもゑくぬハぎりハ世などもあるさて

かく四段に活きて八他のものくこれになぞらふをいひこの
行下二段になぞらふ なぞらふる なぞらふれ なぞらへ
とはみしきてそ他のもれにこれをなぞらふれことにそ
えんを取りなれかくおもひし行ながら活のこゝろなるにて
自他をもとりつといと多かれどこそていさくかまぎらはしげ
なれバ法いでにおきまへおくなり
○によふ 落窪におよひをるゝあり
○弥ぎらふ 日本紀雄略巻に勞軍(ネギラフ)と訶り
○のろふ 霊異記に咒をのろふ 伊勢物語にあるのはりてなうち
てなきの詠ひをる取る 枕草紙にうち語る人をの詠ひ

まがくしくなどゑらたり
○ふれぞふ 源氏初音にふまぎびぬべきたるしやあると文
夫木集に西行法師志づかきねにふれぞひてなどありこ
れ活き月取り 万葉二にながれふらぞくと訶るそふれを迎へ
ていまるなり
○ふるふ 舊事記にゆらくゆく布瑠部(フルヘ)と訶り
○みそなふ 新古今集に神もれとけもれをえそなく
取どなれあり
○まことふ 古事記上巻に委蛇(モコヨヒキ)又日本紀お取し 源氏葵
にもこゝろふことく云く うれ樓上是にはけてこふれもこゝろひ

はへいけるでなどがあり
○もとふ 日本紀神武巻哥にかむかぜの云々いもとひ茂登倍屡云々
古事記にハもとほりとありすべて第四の音よりかよへる辞を
受るはすべてこの法きその格なり
○もらふ 字鏡に餬寄食也毛良比波死とよんだり
○やとはふ 続日本後紀長歌にふみしたる博士不雇須とあり
○ゆるぶ 源氏紅葉賀に心ゆるびなきとあり
○よろふ 万葉一にかゝる与呂布とあり
○よろぼふ 源氏夕貞にうちよろぼひとあり
○たゆく なまきをなげらひ はばくを はぐく まぞし

をまどはし きこしめせを きこしめさく まちとまちし
しみをしるひ ぬすみをぬすまむ いふらふを
いふらふ のきを のらくなど延ていへるとおなじいと多
しその中に此四段に活きたるもあれどみなはぶきて
まなび文ただ其詞をのべしのみにて活くはすれる
もれたりし 又二重にのべていへるもあり 古事記中巻に
はひもとほろふしただみの云々とあるハもとほるを もとほろ
といひ又それをのべてかへしいひ日本紀雄略巻に中つ枝り
あらふふらばく又万葉二に下つ瀬になかれふらばくなどあ
はそふれをふらくとのべ又それをふらばくといへるなり

此類も猶あめなぞらへ志るべし

一段の活詞

ひる 干　○ひる 噴

○ひる 和名鈔に嚏和名波奈比流噴鼻也 古今集にたなるも
ぬぬ風などなれあり下に皷そまのにゑらぎれとも噴と
たなし詞なれべし

中二段の活詞

此ふるを俗言にハひるといふ例なり

○あからぶる　あらぶる　○いなのぶる　○うゆらぶる

○うれふる　おふる　おきなのぶる　おとなのぶる
○おらぶる　かぶる　かぶる　うしぶる
こふる　○こぶる　ことはらぶる　はぶる
○しふる 強　○しふる　○しのぶる　○しきぶる
○たもぶる　○ときしぶる　○なぎぶる　○ねぶる
のぶる　たころぶる　○たゆぶる　たらぶる
○まなぶる　○むつぶる　もちふる　ほぶる
ほりぶる　○ゆやぶる　をきなのぶる

○右に挙たる外何ぶるといふと別なあれべし

○阿からぶる 出雲國造神賀詞に赤玉能御阿加良毘坐とあ

○やちまのこ下

但此詞 麻 行にてその四段の活なれども此行にて頻めてハこゝ
此活きとときこゝえしより此類なれどこれのまゝあり
○いなぶる 源氏末摘花にいなびぬ法心にて 又若菜にかなく
いかぶるを 又総角にえきこゝいなびでなど狂あり
○うかぶる 祝詞に踈夫留(ウトブル)まゝ踈備(ウトビ)などありこれも 麻 行
にてハ四段の活なれ
○うれふる 三代実録に憂(ウ)礼(レ)比(ヒ)かゝあれ法て此詞をつねにこの
行の下二段の活にのこゝ用ひしかるを右の如くあはれ四段の活此
格なりけれど此外に活きたることもえしぞ何まことにもた
しかりハ定めがたけれど四段の活なるべしこれもぬ

これもじ などいふ定まれなるをはそいふべくもたがらぬ
これ活にてそこれひん これひぬ これひじといふ格なり
かくそいふべきは万なれぞこゝにハ出せる所あり但し用しそんに
そ二かゝに活く詞の例四段の活と中二段の活又四段の活と下
二段の活などにハこれかれあまでど中二段と下二段とに活きて用し
そんなるを例なしなれ此行四段の活詞のたゝくもふといふ下に
いくることなりむかきかゝる法し
○おらぶる 万葉丸にさけび於良妣(オラビ) 日本紀崇神巻に呼哭(オラビナク)又
雄略巻に呼嗁(ヨバヒオラビテ)などあるのみにて外に活きぞれぞ四段の活なるとも
おもへど狂これ活のかゝなるべし

○こゞぶる　字鏡に媚ハ古夫（コブ）　霊異記に媚ハこびとゑ〳〵　古事
記上巻に媚附（コビツキテ）云々となり此外に活きたることゑてぶれども
これ活詞ときこゑてゑ漢籍（カラフミヨミ）読にそこびんとこゝ此ならく
らきばりにいくゆ
○志ぶる　万葉三にいなといへど強流志斐（シフルシヒ）能我強語（ガシヒガタリ）云々又
六帖四に人をも志びじなどあり
○志ぶる　和名鈔に聾和名美（ミヽ）之比（シヒ）又盲和名米（メ）之比（シヒ）　古事
記にもあり これも外に活きたることゑてぶれども此活詞なるべし
○志のぶる　源氏箒木にたづぬまどはさむともかくれ志のびぶ
云々若紫に志のびさせぬべきに云々　浮舟に志のびさせぬふ

ましきゑんまれぞ云々　栄花物語うらくれ已かれの事に
志のびさせたまふなどありさせといふ詞を第二の意より受
るまで中二段の活にかぎれり此本志のぶる志のぶれといふハ
後に多し又万葉十一に不竊隠を古き点に志のびずて
とよめ此ハ此詞四段に此活きてこれハ全くおなし
○まさぶる　源氏朝貞にのまひすさぶる人となり此詞も麻
行にて八四段の活詞なり此行にうつりてハこれ活とせり
○たけぶる　古事記上巻に建而　訓建云多祁夫　万葉集十一におも
ひ多鶏（タケビ）備てなどあり又日本紀雄略巻に叱をたけぶしゑ又
たけびしゑとも訓点あり此外に活きたることゑてぶれバ

四段の活りこれもなほ定めがたしされど先志ハうくこと
におしおきつ又其もかゝれて志ゑといふ辞(テニヲハ)を第一の音より
受るを四段の活の格第二の音よりうくるをこれ格なれバ
たけだしゑと第一の音より志ゑといひてハんて四段の活
詞たけびしめと第二の音よりいひてハこれ活詞なりかく
二ヶやうによみこれを四段にも中二段にも活く詞かや
○かゝもしぶる 万葉十七におとのこ母名のこもきて登母之夫流(トモシブル)
がねとなりこまも 麻 行にてを四段の活詞なり
○かぎぶる 万葉一に柔備(ニギビ)にし云々とあり此詞も外にみえ
ばまどもこれ活なれべし

○弥ぶる 物語書に弥びとくのひ所どあるをいふ此詞も
かくれたるあれて外にはなきたることなれどこれ活
詞ときまこえる事
○ゆかぶる 伊勢物語にかまいひのこへになるごおとして
ゆかぶるとあり此活ざまなり俗言にもゆかぶるといへり
○まなぶる 千載集序に此哥はそをまなぶることをきく
そに云々とありて又下にふこれ居字まなぶるといへりこゝ
乃活さまを此詞四段の活にのこ用ひてかくいへるハ外にもあ
ることを云ふをれ所しことくきこゝろなり
○むすぶる 六帖三に淀をむつぶるあるを云々 源氏蓬生に

○やちまつ下

例をはしきもむ都びぬを 又夕貞にしきもしくしきひむつぶる
まちぶ無なかぶあり
○ゐやぶる 続日本紀宣命に爲夜備末都利 日本紀継體巻
に礼賢まて跪礼などありはて又日本紀孝照巻に礼神
第三の意より下へはぶけてよめるを四段の活の格なめされ
ど此詞のさまに四段の活詞の如くにはあらぬこれ活詞のさ
まにおもはるれどこゝにおせり所ゆよく考ふべし
○これしび かなしび くやしび たふとび ゑぐび などある
も 麻 行にてを四段のはなきを詞なきを此行にこゝ都めて八
これ活き所るべし

下二段の活詞 此ふるを俗言にへるといふ例なり

○あふる あがまふる あまふる あまらふる
○あくも所ふる いらふる ○うらふる ○おくまふる
おさふる おとろふる かふる ○かしふる
かぞふる かぞまふる かまふる ○かすふる
かむかふる くぶる くたふる くらぶる
○こしらふる こまふる さふる さまたふる
さほらふる ○しらがふる しらぶる ○まぶる
そふる そろふる ○たふる たがふる
○たぐふる たくハふる たくふる たづきふる

たとふる　たとりふる　ちがふる　ほかふる
ほかふる　ほどふる　ぬくのふる　ぬなのふる
ぬらふる　○あぶる　ながらふる　なぞらふる
なぞふる　ならぶる　のぶれ　○そふる
○そこほふる　○ひかふる　ふりふる　ふそぶる
かこつぶる　まがふる　まじふる　よそふる
ひきこりふる　をふる

○ひふる　蜻蛉日記にかこくとのぞめこぶりハあふれどもまぐ
ほかゆかぬこゝちてそれまゝ又ことばかきなふべくもあらぬ
源氏葵に心もえをさめあふまじく　真木柱に人の見あふる

かどもなく　浮舟にはぐかりあふまぢくなむ　狹衣三に人めも
えおこみあふまじく於菜花為語にもなり又　詔詞解に
敢末之時止為　旦をあふまぢとしてとよまれたりすべてましの
てにをはそ切るゝ詞よめ受る例に出てあへとハ者に多くいへり
○ひまなふる　日本紀應神巻に欲和をひまなへかハむとにと
よみたりこゝ此活さとも取り又　仁德巻に不和をあまのなハ次と
よめるまて四段の活さまのなり
○こらふる　古事記上巻にふとまほくト相而（ウラヘテ）となりこらふ
こらふる　こらふれなどいへるとハ見えばれどもかく活く詞の格に
○おくまふる　万葉十一に奥間経而（オクマヘテ）ひがそふいもとありこまとも

外にはんくぎれとも此活の例なり

○かゝふる　竹取物語にかゝぐをれり　蜻蛉日記にやうてのゆくかゝぐてそのしぬ　菓花物語楚王夏の巻にはなくくかゝぐまのつらせあへりなどのことありてかゝふかゝふるかゝふれといへるもあたらぎれどもかく活く例なり又[也]行下二段の活にてかゝゆかゝゆるかゝゆれかゝえといふ詞にとも思へどまそべてあるとしるゆるハおもくこゝ此活詞にいひもれくおのづからしるハ[也]行の方にいへるを猶ここの活詞なるべし

○かまふる　菓花物語月宴におもしかまふと云ゝ又かまふる

故ここにいくなど能和おほし

○こしらふる　日本紀に慰喩（コシラフル）と訓り又こしらへといへるハ物語書におもしこれも[也]行にもあらざるべし

○しこらふる　竹取物語に心にもしこらぐべきとあり

○まぶる　玉葉集夏に夕されぞ涼こゝ此のはちまぶり玉ゆりすぶる此のほしきとよめりまぐといへるハ老のことし

○たふる　源氏物語相壷にえこふまぶりとあり　たぐとハ老におほし

○たぐふる　敦忠集にわがえとつこぐふる風を云ゝ　たぐぐといへるを老のこゝ能り

○なぶる　蜻蛉日記にはきにやけにしかくどこ語こゝひハおしなぶるなめりこれもなぐといへるをおもし又うつハお

語兼宴 寄ふうきなむる人そもしるへき花のかはそ云々とあるも
なぶるなり此行と麻行とかよふハ老のことなれバなむるとか
けるのことにて麻行の下二段の活にもあらばるべし
○たふる 万葉十八に志き波布流こゝろしなくハ云々 新古今夏
に志めたふるかでとあり これもたへといふそつねなり
○たらふる 万葉十七に中臣のふとのめ此ごといひ波良倍 伊勢
物語にたらへはるゆゑに 六帖にたらふることを又たらふれバ又糸
法もてたらへん云々 後撰集夏に夜たらへる 拾遺集夏
にたらふることを 同哀傷にふち衣たらへてはつる 後拾遺
集雜にはらへ法るか 兼盛集に河水にたらふることもなと猶

おもしけて此詞をかくおもしくおせるハふるくハ祓もたく四
段の活にのみ用ひるをかゝ皆より祓にかぎりて四段の活にい
たる文を用ひ此活にのみいひていにしへ今此ことゞひあれぞなり
○むかふる 古今集秋詞書に紅葉のちる木のもとに馬をひかへ
てとあり此外にもかくのみなりて外に活きたることをえてざ
まバ也行の下二段の活にも思へどなかしにもあらじこの
よしかふるのことにいへるがごとし
○万葉二十にちはやぶる神をことむけ麻都呂倍奴人をもやハ
し云々とあるハこれ活ざまの所りけれど此詞此行四段の活きに
此をもちひてこゝの活にいへるハ外に例なく又かく活く詞のさ

○やちまたに下

まともなくざれぞこれ活詞の頭にそむさば

○万葉十五にこまつしひはあしてゆふべに多麻布禮杼挾衣

ふきぬのまそそをおかくふまへ片く　枕草紙にしつきぬ紙

乃むすべするうへにおきわたしこるほうのなどもあるまでかに

活ぶれバこれ活詞にあらず　こまふれハこまのへ　ふまのへて

ふこを延ていひむすべハむすびれを結ていくるなり　所か

此ことに加行下二段の活の末にいくわ

麻行之圖

并受るてにをはの図

四段の活	一段の活	中二段活	下二段活
住讀（スム ヨム）	見（ミル）	恨試（ウラムル コヽロムル）	聚責（アツムル セムル）
ま	み	み	め
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ
み	みる	む	む
しるけんりて しるぬるなきつ しりなバ	しるけんりて しるぬるなきつ しりなバ	しるけんりて しるぬるなきつ しりなバ	しるけんりて しるぬるなきつ しりなバ
む	みる	む	む
とも とらし ごきらめり	とも とらし ごきらめり	とも とらし ごきらめり	とも とらし ごきらめり
		むる（ミ）	むる（メ）
よりをふまでかな	よりをふまでかな	よりをふまでかな	よりをふまでかな
め	みれ	むれ	むれ
ども ぬべ だ	ども ぬべ だ	ども ぬべ だ	ども ぬべ だ

○やちまのこ下

四段の活詞

ゐむ	ゐのむ	ゐりらむ	○ゐさむ
○ゐらむ	ゐはまむ	ゐやしむ	ゐやぶむ
ゐまむ	ゐまむ	いむ	いりむ
いさむ	いさしむ	いさむ	いぬくしむ
いぎむ	いきなむ	いぬれしむ	○いれむ
うむ	うむ	うぬむ	うたこしむ
うとむ	○うべなむ	うまりしむ	うらやむ
○うはらしむ	うれしむ	○おいぎむ	おむりしむ
かむ	○かむ	○かいまむ	かぐむ

かくむ	かしこむ	かまむ	○かぐむ
かごけまむ	かかしむ	○きぶむ	きぎむ
くむ	くむ	くくむ	くやむ
くるむ	○くらむ	ましきぶむ	こむ
○ことなしむ	このむ	さいなむ	むむ
むぐうむ	○むぐかむ	むぐむ	○むぶむ
○むかくむ	むらむ	○むらむ	○むりむ
まむ	まむ	まくむ	まきむ
まくむ	まぐむ	そむ	そねむ
○たむ	たくむ	たしなむ	たくむ

たのむ　たのしむ　たゆむ　たまむ
ちぐむ　ぬむ　ぬむ　ぬかむ
ぬしむ　○ぬぶむ　ぬるむ　○ぬるしむ
ぬよむ　なぐさむ　なぐこむ　なづむ
なへだむ　なやむ　なまぶむ　○ぬがむ
ぬくむ　○ぬぐむ　○ぬだむ　ぬぬむ
ぬまむ　ぬるむ　ぬれむ　のむ
のむ　のぞむ　ぬむ　ぬぐこむ
○ぬづりしむ　ぬげむ　ぬさむ　ぬらむ
ぬがむ　ぬそむ　○ぬるむ　ふむ

ふくむ　○ふくぐむ　かとめばむ　まどろむ
○ふつとらむ　むしだむ　ふもむ　やむ
やむ　○やくさむ　○やまかむ　やまもむ
ゆがむ　ゆるむ　よむ　よどむ
○よくむ　ゑむ　ゑがむ　ゑしむ
まろがむ

○何だむといふと狩あるへしこなこれ活なり
○あきむ　源氏若菜ふみであきみ　うつか物語俊蘿ふ天
下れ人いひあきみて　狭衣りあきみはしらせなふ　演拙本納言
おもひおどろきあきむなどあり

○やちゆのこ下

○あらむ　万葉二に敵見有（アタミタル）とあるも此外に活きたるものなく
げれどもこれ活なるべし中二位の活のみあらじ、
○いぢむ　日本紀神武巻屯聚居之（屯聚居此云怡皮弥萎）又欽明巻に
充満（イバメリ）などあり
○うべなむ　続日本紀宣命に天地乃宇倍奈弥（ウベナミ）由流之天とあるも
なこれりこれ活なる信し
○うぶもしむ　伊勢物語にわがせしがごとうるはしみせんと
なめこまでも上におもふとあし
○おいぢむ　枕草紙においぢことあり
○かむ　和名鈔に掃俗云波奈加無（カム）　源氏総角巻にはなかなかバ

しぢこちかこてなどあり
○かいまむ　いせ物語にかいまみてけり　大和物かたりに
かいまみぞ所といへり
○かぢむ　霊異記に斯を可陀弥（カタミ）　日本紀又続日本紀宣命に
斯（カダム）とあり
○かたぢけなむ　続日本紀宣命に辱弥（カタジケナミ）とあり
○きぢむ　好忠集に知たにきぢむ　拙の葉をとらんり
○ころむ　狭衣にこゝろわたりとあり
○こゝろ所しむ　古今集にことなしむともいふるしあらみれや
又源氏物語にこゝろなしみにもあり

○やまらはのこ下

○しづかむ 源氏行幸にほゝゑみてしづかにはかりしをといふこと
まなくしづかなる 枕草紙にしづかみたる髪になどあり
○しぶむ 万葉十八に之保美かれゆく
○しぶじむ 源氏明石にうちしぶじむもありて又藤壺に
しぶじぶとながらしかぞ文夕顔にしぶじみ云く 濱松中納
言物語にこそかゝれしぶしぶなる人をながらへくらり
○しほむ 枕草紙にいとうしほみかれてと云り
○しかむ 万葉九にしかめしはぶき皺奴 字鏡に酢を
於毛氏志和牟などあり
○たむ 万葉集三にあきらしま 榜回舟八まつくむこのうらうらと

榜転小舟又十六にやらのさき紀多未足こぎたみとながらへありと
捨たる名にさてたみてこそのそいひがたあるにあなし
須とまたらうり法て外洵中二ほりも法きて同しくみ侍り
○とかむ 今撰和歌集に色真入を立枝に杉ぶきを花なり
めでたきとあり
○かもしむ 万葉集十七にはかなきものを等毛之美し
○かがむ 源氏椎本にかがみたる 椥衣にかがみかゝり
などかゝりあり
なほいへり
○ゆがむ 日本紀崇神巻に和亨とあり

○かぐむ　源氏葵に かぐめる時ぞ　栄花物がたりの雲林に
こなかぐみたり
○たづかしむ　続日本紀宣命に愧美（ハヅカシミ）とあり
○むるむ　和名鈔に痿痺俗云比留無夜末比（ヒルムヤマヒ）此活詞と等ゆ
○ふくぐむ　源氏物語紅葉賀にうちふくだみたるびんぐきなどにあり
○こつりぐむ　源氏夕貌にみつりこつみてまゝこ侍るなり
後撰集雜に志ら川のみつかしむ見ておいかゝるゝなどあり
○やくけむ　古事記上巻に日ゞ御子こち不平（ヤクサミ）まのけらし
日本紀神代巻に擧體不平（ヤクサミ玉フ）など猶あり

○やさかむ　古事記下巻に瘦萎（ヤサカミカシケテ）とあり
○よくむ　万葉集四に老舌出て與余牟（ヨヽム）とも少しあり これ
活のさまに能り
○なみ居　なみ立（テ）るなどいへるまでなくびまでこれ活詞にハ
あらぬ又万葉七に此しの夜のかげに將比疑（ナミムカ）とあり此ハ此
行中二段の活きはまなれど志の活く詞のさまにあらざれ
ばこれハ誤まなるべし

一段の活詞

みる見

○やちまた下

伊勢乃哥ニ
うらむる ト云フアリ
黒川先生ノモトラウ
引ハ心見ニテ其ノ轉レ
麻行下二段トナレルナリ
シカルニ見ノ轉ハカサ
アル中ニ堀間見ナド
ハ四段ノ方ニ轉ゼル例
ヲ以テ見レバ古ノハラ
引モ四段ニムレフト
レフレタリ

中二段の活詞

此むるを俗言にみるといへり

○ゐむる 俗 ○うしろむる ○うとむる うらむる

うしろむる ○だむる

○あむる 古今集に都べしへゆあこんとてこゝ枕草の紙す

ねおきてゐむる湯をこゝなど能本なり

○うしろむる 狭衣にうしろむる人なのらんよめハとあ

まうしろみといへるをおもし

○うゆむる 源氏升川にきこゝうとゆるとなり此て此

詞此四段にも波行の中二段にも活きて皆同じそんし

○たむる 万葉六にこゝき多武流うられて少くゞ又二十に

をかれさき伊多牟流ことになどなり志の外たこん たこゞ

たこじ ためん ためぞ ためじ など活きたるとみたぞ

まぞこゝ此活きの此下二段の活りいづれとたしかにさぐみん

がくれどこゝの方能るべし

下二段の活詞

此むるを俗言にみるといへり

あのむる あぐむる あきこむる あこゝむる

あ都むる あたむる ○あやむる あらゝむる

いさむる いかしむる うのむる うぼむる

○えしむる ○おとしむる かしむる かぼむる

○やちまつ下

かゝもむる　○かゝもむる　かゝもむる　○きゝもむる
きゝもむる　きゝもむる　こゝもむる　こゝもむる
けもむる　けゞもむる　志もむる　志もむる
○志ぐもむる　志ゝもむる　○志ぢもむる　志ぢもむる
○志なもむる　まゝもむる　せもむる　○せゝもむる
そもむる　○そぞもむる　○たふともむる　○たもむる
たもむる　たしなもむる　たのもむる　○たゆもむる
たゝもむる　ちわぞもむる　ちゝもむる　ちゝもむる
ぢゝがもむる　ぢゝぢもむる　ぢゝぐもむる　○ぢゝもしもむる
ぢゝゝもむる　なもむる　ながもむる　なゝきもむる

なゞゝもむる　なゞゝもむる　のどもむる　○ちもむる
ちゞもむる　ちしゝなもむる　ちやもむる　○しもむる
しがもむる　しそもむる　しろもむる　○ふのもむる
ちもむる　○みしもむる　やもむる　やまもむる
ゆがもむる　をきもむる

○何しむるといふこと所々おほし皆こゝ此活なれ、

○あやもむる　堀川百そうしきゝかふ法くまぬ他も人ぞあやむる

散木寄歌集に遠ほとゝもものゝしきぞかきゝぐはいはぬふ人は

ゐやめましやハ　濱松中納て物語にまゝめいれてまつめてしを

おもしあやめて人つまゝ給へりけるなめゝまどあめ

○えしむる　万葉二十に見れば依志米（エシメ）しとあり

○おとしむる　源氏桐壺におぼしめしたそれこそ云く様あり

○からむる　伊勢物語にからめられ入り　落窪物語に

かゝむるやうになどなり

○きたむる　続日本紀宣命に支多米（キタメ）なふべく　日本紀皇極

巻歌に此ことのかみまとうち岐多麻（キタマ）須母（スモ）となり此まゐきむ

の延たれはなる所なり

○しぐむる　源氏行幸にしきしぐれぬひて　浮舟にこしきし

きしぐめかしこりめてなどいへり

○しぢむる　於遺集雑にしぢめじと云くとあ来

○しなむる　日本紀崇神巻匿をしなんてとよめり

○せしむる　狭衣にたのがりをとはまかりさりにせしめ云々

又母しつまとせしぬにしめきしる所どんとしあり

○そだむる　源氏桐壺にあいなくめをそばめ法く又竹川

にそだゝれとゝなり

○たふとむる　新古今集序に耳をしふとぶるなりとなり

里このぶるハむるといふにおなじ

○たむる　六帖に真弓しむれどゝあり　後於遺集雑に君に

こそ思ひしめしるこゝ八溜に弓をしむるものぬしり

○たゆむる　源氏紅葉賀にたゆんぎこゝゆとあり

○ともしむる　万葉十に今ごぶん延年（トモシムル）べしや又十一に目莫令乏（メナトモシメソ）

○たむる　万葉十七にうち波米底（ハメテ）とあり又いせ物語にきつにはめなでとあるためはたすせの語ひしるしはれどもとハ同し詞也

○ひむる　源氏繪合にいはく見めてとあり此活きは可也

○ふのむる　万葉二に深目手（フカメテ）もへと　古今集に何にふかめて

おもひそめけんなどあり

○見しむる　万葉十七に見乏米（ミシメ）とあり

○蜻蛉日記にはれバてそいのちも法に忘むれとあるを故にしめの延ハめしるにてこれ活詞にあらずはこと上のもいへり

也行之圖　并受るてにをはの図

中二段活

老（オユル）報（ムクユル）	愈（イユル）榮（サカユル）
い	え
ぎて	ぎて
で	で
じ	じ
ぬ	ぬ
ん	ん
し	し
て	て
ゆ	ゆ
ゆ	ゆ
ゆ	ゆ
ゆる（イ）	ゆる（エ）
かな	かな
まで	まで
に	に
を	を
よ	よ
ゆれ	ゆれ
だ	だ
ぬ	ぬ
ど	ど

下二段活

○此行にて四段の活一段の活なし

中二段の活詞　此ゆるを俗言にそいるといふ例なり

○おゆる　くゆる　○こゆる　○むくゆる

○おゆる　源氏手習に年のおゆるまくにそとあり

○やちまく下

○こゆる　万葉五にうち許伊ふしてなど所ゆあり　今ゆ
こゆ　こゆる　こゆれなど活きたることもえくばれども加く活く
詞の例なり　又こう　こうる　こうれと活きて　阿　行の詞なり
こもおもふべけれどこゆる　こゆるなどやうの外の行にうつりて
たゆけれど此行の詞なることあきらけし

賞ヤシ　杯ト働ラク同考フベシ　オヒヤカシ　殖ヤ　是モ考フベシ

下二段の活詞　此ゆるを俗言にそえるといふ例なり

○あゆる　○あゆる　○あゆる　○あゆる
いゆる　○いぢゆる　○おびゆる　おぢゆる
おもかゆる　きゆる　きくゆる　○くゆる
こゆる　こゆる　さゆる　さりゆる
○しなゆる　そびゆる　たゆる　○ひゆる
○ちゆる　○ひゆる　○ちゆる　まみゆる
みゆる　そゆる　○ひのゆる　○をゆる

○あゆる　うたかは物語花びらきに松風なきらめる君も
えてしかれうすれける子のあえものにせむかへし松風をあゆ
とやきれる君のこのまゝの年をまつの世ふとてきてく後撰集
にこの代にあらるのくらかゆにあえてきね　金葉集連哥ニ
なかくゆるをあゆといふらんなどあり

○こゆる 万葉五にこち許伊ふしてなど所にあまた有
こゆ こゆる こゆれなど活きたるとも見ゆれどもかく活く
詞の例にあり 又こう こうる こうれと活きて 阿 行の詞とも
見おぼゆれど こやる こやれなどやゆわの行よりつゞきて
あるけれど此行の詞なることあきらけし
○むくゆる うつほ物語 後撰にむくいんとよめり

下二段の活詞

此ゆるを俗言にそえるといふ例なり
○あゆる ○あゆる ○あゆる ○あまゆる
いゆる ○いえゆる ○おびゆる おぼゆる
おとにゆる きゆる きこゆる ○こゆる
こゆる こゆる さゆる さゆる
○たなゆる そびゆる たゆる ○ひひゆる
○たゆる ○もゆる ○ちゆる まみゆる
みゆる ふゆる ○このゆる ○ぬゆる
○あゆる うたに物語見えぬしまに杉風ふきしめる蒸を
えぞしかもうけれけるこのあえもの心もちかへし杉風とあゆ
とやむれるおのこのおもを年をとまつの世をとこさきく後撰集
よしそこの代をいふをくこのあたにあえてきね 金葉集連歌に
なかくあゆるとあゆといふらんなどあり

○あゆる　万葉八に玉にぬく五月をちかく安要奴がり
花咲にけり云々又十に秋佐ありそ其の花の阿要奴がに
云々又十八に安由流実ハ玉にぬきたく云々などゐるゝなり
○あゆる　落窪に血あゆだかり　枕草紙に何せあゆること
こちぞ志ゐる所と於あり
○何まゆる　源氏井川にあゆえて寄生に何まゆえてまゐて
栄花物語にも何り皆あゆえてとのこゝあゆて外に浴また
ゆこと見あるべしまゆ　波　行下二段の活りとも思へど俗云に
あゆやの花といふ詞もあれバまゆこれ活なるべし
○いだゆる　和名鈔に嘶和名以波由源氏総角に又どもの

いだゆる　後拾遺集に弱ぞいだゆるなど狩衣しけことゝだ
を近き世にいだひ　いだふなど　波　行の四段の活にいへど
新古今にこゝ詠まで志のいへること所し
○おびゆる　万葉集二に恊流までに源氏物語箒木に
やとおびゆれど若菜におびえさわぎてなどあり
○こゆる　万葉十四にみこ志のさまの伊波久叡乃君が久由べき
○志なゆる　万葉二に夏草のおもひ之奈要て云々十又十九に
之奈要こゝぶれなどあり此て此詞のこと　波　行の四段のもなり
きしまふの形にいへることあり記しきるべし
○胡びゆる　字鏡に瘠豆比由とあり

○やちまつく下

○たゆる　万葉二にかるれば波由流とよみたり

○ひゆる　於き集にみハひえにけるとあめ

○かゆる　霊異記に喚吠を保由と訓注あり

○ひゆる　出雲国造神賀詞に御若敵坐（ミワカエマシ）　忠岑集にをは

菓のしばくをおもひこひゆてふ　忠見集に人のひゆる面の

うへに赤染衛門家集にあるにひゆるなどみえたり

○をゆる　古事記中巻に御軍皆遠延而　日本紀に瘁瘼など

の字をしのよみたりけてかに活きたることもしらざれバ阿行ゆゑ

も思ふべけれど日本紀にをやはしやよりはまうけぎ此行な

ふことしれし

羅行之圖

并受るてにをはの図

四段の活

中二段活

下二段活

サル去ツル釣	オル、下フル、舊	カル、枯ハル、晴
ら	り	ま
ぞでじぬんまし	ぞでじぬんまし	ぞでじぬんまし
り	て	て
てけんしるし	てけんしるし	てけんしるし
てきなばぬるしら	てきなばぬるしら	てきなばぬるしら
る	る	る
めゆらんべきらしとも	めゆらんべきらしとも	めゆらんべきらしとも
かなまでにをよめ	かなまでにをより	かなまでにをより
ま	ゐ	ゐ
ぞ　ぞ　ど	ぞ　ぞ　ど	ぞ　ぞ　ど

○此行のみそ一段の活詞なし

四段の活詞

○黒川先生曰四段ト下二段トニ活キテ同意ナル詞トモハ羅情ニシテアリテ他ノ行ニハアルヲナレ云々 按ズルニおそるなどの類

ある　あかる
○あぶる　あぶける
あおもる　あなづる
あもる　あもする
いる　いる
○いぶる　いける
いぶもる　いのる
うる　うけだる
○うもれる　える

あかる　あまる
あくる　○あけまする
○あなくる　○あぶる
○あやのる　あくしまする
いかる　いきどふる
いくもる　○いたのる
いもれる　いろどる
○うごなける　○うぞくまする
おる　○おきのる

おくる　○おくまる
おこくる　○おそる
○おかどる　○おもねる
かる　かくる
かぎる　○かくる
かぎる　かき削る
かしこまる　かしける
かくる　かたる
かくる　かもる
きまる　きしる
くる　くる

○やちまの下

おこる　おぐる
○おこなける　おとる
かる　かる
かごふる　かごまる
かける　○かぎる
かしこまる　かしる
○かなぐる　かたる
きる　きる
きしのりける　くる
くぐる　くぐまる

一種ノみぐる
黒川先生曰ク ふきるなり
そりてナドノみたり
みたらしノ約リ又ハミテ
乱ラす方ニナリテ自然
ノ方ニハマラズ按ズルニ漢
文ノ風俗を記すナトモ同
シ人スベキカ

ぬる　ぬぐらかる　ぬかる　ぬかる
ぬまある　なる　なる　なる
なのる　○なぶる　なかる　なかる
ぬぎる　ぬぐらる　○ぬぎる　○ぬぶる
ぬる　ねる　○ねぶる　ねむる
のる　のる　のる　のらる
○のぞらる　のぞまる　のしまる　のぞらる
のがる　たる　たいる　たかる
たしる　たじしる　たしる　○たれる
たぐかる　○たぐらる　たふる　たぶる

ちやる　○ゑる　ゑる　○ゑらる
ゑのる　ゑろまる　ふる　ふる
○ふる　ふける　ふしがる　○へなる
ちる　ちる　ちらる　○ちそる
○ちどらる　ちどだしる　○ちびらる　ちゆる
○まる　まかる　○まかる　まきる
まけぐる　まぎる　まじたる　まじらる
まつたる　○まなぐる　またる　まもる
まゐる　みぐる　みのる　○むかる
むさがる　むれのる　えぐる　ゑる

○やちまた下

○三十九

もる　もる　○もぢる　もぢる
もとかる　やる　やる　○やはまる
やぶる　やぶる　○ゆる　○ゆまる
ゆぶる　ゆりまる　よる　よる
○よきる　よこぎる　よこなのまる　よこかる
よぢる　よりる　わる　わる
わまる　○わはる　わける　○わぐかりる
まる　まる　まる　○まこ法る
○まぜる　まどる　まちる　まくる
○此外あはれがるからがる　くるしがる　こひしがるなどいくる

ここひ多しこなこれ法なり
○右は挙こる詞の中に有居の二ッいまくうこ此ゆ　まぐて
四段の活の第三の音くまつふむるハ図はもまるせるぬく
切るく詞と強く詞とまかねられぞあるとも　あるとも
まるともといふべき格なるは此二ッの詞のこなりと　なりとも
まりとまりともといひ又切るく詞にもありまりといま
例なり其外　めりらんべきらしなどのてはまはをこく
はそすぐてはこと能ることもなし
○あぐる　万葉五にしたち阿射里（アザリ）られこひのみんど云々
○あらくまる　栄花物語露林になしくまらせしてもひても

なり此をしてきばかなる索

○あなたる 日本紀舒明巻に入二畝傍山一因以探山ヲ 欽明巻に考二穀古今一ヲ 又字鏡に覈阿奈久留 栄花物語らうく此別に常刀や瀧口やなどいふものどもよるゐるはふくひ関をかくえなどしていとうしてあり世にそおかなかれ此にひはくふもいかゆくしなどなめ

○あぶる 字鏡に焚阿夫留 後撰集物名に衣あぶらん

○あやかる 於先集に阿やかめやまさ云くとなり

○いさる 万葉十五に伊射流火波とあり

○いつがる 万葉九に伊都我里まのせバとあり

○うくなはる 大祓詞に集侍 続日本紀に末為宇古那波礼留

○うまぐまのる 古事記下巻に庭まぐめ宇受須麻理韋弖とあり

○うまゐる 日本紀允恭巻に蕃息仁賢巻に殖皇極巻に不蕃息などあり

○おぎのる 字鏡に賒於支乃利 工作日記におぎのめ見ぎなどして用ゐどあり

○おくまのる 源氏若葉におくまりしる又檜姫におくまり云く

○おそる 続日本紀宣命に懼理とあり此詞中昔よりハ此下二段の活きなれといへるをたくまかく四段の活きなれも用ひたり此例隠觸志などあり

○おそなかはる　う都ハ後陰ニ夕のおそなかはるなどゞかに云く
○おそとる　万葉十六ニふちの木にたひ於保登禮流とあり
又源氏東屋ニおそとれしるとあるハ同し詞ときこゝしれぞ
しるといふてゝのまとは字ハ四のまゝより受しるハ此下二段の例ニ
て活き異なるゆゑ習慣のもかくあり
○おそねる　日本紀神武巻ニ侮媚をおかねりとよみたり
○かくる　古事記上巻哥ニ青山ニ日ゞ迦久良婆下巻ニこやま
賀久理　万葉十五ニやそしま我久里などあれあり此詞も
上ニいくる如く中昔ゆゑハ此下二段の活ニのみ用ひたり
○かげる　古事記下巻ニ此ふ日の日賀氣流美夜云々　祝詞ニ

もあり又新古今集夏ニ然もせの葉のかげろひてすゞしく
くもれとあるをかぎりを延しるなり
○かなぐる　源氏箒木ニひきかなぐらめなどあり
○くきる　字鏡ニ鐵ハ伊比久佐礼利とあるたり
○くねる　古今集序ニ女郎花の一時をくねるなるも云々又
靖蛉日記ニまくしそくねりてかきつなどあり
○くらがる　竹取物語ニせかひくらがりてとあり
○こぞる　栄花物語月宴ニ世こぞりて船ぞ狂あり
○こやる　古事記中巻歌ニ阿那さ弓許夜流許夜理母と
よみたり又古今集ニよくちりふせる佐夜の中山を奥義抄

によそらむかとよめるとあるを證とすべし
○はくぐる　おちくぼ物語又枕草子にはくぐりと見ゆ
○しづまる　栄花物語玉飾にもしづまるやうにて
○しづくる　うつほ藤原君にたきもの火のしづめつけられて
○しなのる　古事記下巻寿のやまとの士麻理斯麻理とよめり
○しなえる　伊勢物語に女をまもりてしなえてしなえける
まもらせたまへとあり又源氏乙女に浅うどもやりしどけなるべき
○しぐる　うつほ物語吹上下にたなびきしぐるる上に又源氏
桐壺にえもいはずしぐれて物をあり
○まくる　うつほ物語あて宮にまくらで　源氏士帚木に
臭むかくりなどあり又万葉五にかまの酒もち須々呂比弖
ともりくり須々呂比ハまくらかなり
○まくる　拾遺集哀傷にすぐれど堀河百首夏にすたれるや
やにふるぶる云々同二郎百首にまくたりぬべしなどあり此
堀河百首兼務文一本にまくるとあめれど此下二
段の活きにはあらず
○まぶる　宇治拾遺物語に氷のひあがりかくまみれて云々
またぶかもぶりきたる髪をあらして一座をはしめ
○せめる　うつほ藤原君に世をわたりせれる大学なとはんノ
○そくる　万葉集十七に阿遣曽々理宮まくらちゆ　神楽歌

よゆきやつ[illegible]に曽々利あげよなどるんくしつや

○そくしる おちこち物語にちやちこひそくしつやて蜻蛉日記七にくれ[illegible]せむなどいひてそくしつやねしるなどに菓花枝語楚王夏にそくしつやふせしてすつや云々などいくり

○しくなはる万葉一に疊有(タヽナハル)枕菓張に髮のうちしくしなはやて狭衣四にたくしなはやねてなどあり

○却ぐしる 字鏡に醋左加奈豆々志留とんくしつり又源氏箒木に[illegible]しやうしふ又万葉集五にかくしたれを取都豆之呂比とも延ていくや

○却しる 字鏡に膜孕始非也豆波利乃登支 和名抄に擇食ハ豆波利おちこち物語にいつしかと却しやうへバ金葉九にまかくれに却ハるとるくしたれども見くなどあり

○なづさはる 神樂哥にみてぐらになるしものをまく神のこてにいらられてなづさはるべくとあり古本又拾遺集にハ浩勺をなづさはましまとせりはてハ波行の四段の活詞となるべし

○なぶる 万葉十五に人奈夫理のみこのまであるらんとあり

○りぶる 字鏡に蹋ハ不弥尓志留とるくしたり

○りぶる 日本紀天智巻に鋭鈍(トイサキニブリ)力竭ッとあり

○ねぶる 字鏡に譫ハ祢夫留とあり

○のぞくる 日本紀齊明巻に病自蠲滔(ノリコリヌ)とあり

○たなる　万葉二十に波奈利蘇乃はしをたなれてとなりか
く四段にても活くとしるべくしかれも中首よりも此下
二段の活きなのをいふ
○たびこる　日本紀顕宗巻に被をたびこれり又たどこれ
まとこもよみたり
○ひる　和名抄に痢久曽比理乃夜万比又放屁倍比流
○ひこる　於き集に松の流に乱たりたる所を狭衣三り
白かねの波よせてひこれる松の事のみどりの此云く堀河百
そ夏に五月而を日数ふまでとも和このべの太郎の歌ハひこれ
ぎりはり能どあり

○ふる　万葉二十に以ていたに布理古事記下巻にこふことを
やはくはぎ布禮（解）などありはてかくこその結びにふれといへ
はそこの此活の格にこれも中首よりハ下二段の活にて用
ひたり下二段の活にてハこその結びそふるれといふが定りし
此事ぢめまがひやすしよく考へ辨ふ法し
○へなる　万葉十五に山川をなるに敝奈里氐などあり
○ほそる　栄花物語花山にたそらせのふとなるハ此の活ばすも
○ほどこる　日本紀顕宗巻に被をたどこれりとよみたり
○ほびこる　万葉十八に雲保妣許里弖となり
○まる　古事記上巻に屎麻理ちらしき　万葉十六に屎遠麻礼

竹取物語に法バらゝめれまわおけるふるゝそをこゝ

○まくる 枕草紙に袖かいすくわとあり

○まながる 古事記上巻にたゝき麻那賀理とあり

○むかる 万葉二十に敝牟加流ふねとよみたり

○もぢる 宇治拾遺物語にのびあがわかゞまわてまゐべき

かぎわまぢわまぢり云くとあり

○やはまる 続日本紀宣命に息安麻流倍伎又休息安麻利旦

○ゆる 住吉物語に土もうちゆわらりたるとあり

○ゆはる 神樂歌に由須利あげよそゝわあげよ狂あり

ゆ ハ俗ニハ自然ノ上カニ云フトキハ下二段ニゆすまんゆするゝトモ又ぶヲ入レテゆすぶるゝトモ

○よきる 源氏若紫によきわれもしましたるとあり

○ほはる 日本紀神代哥におきまるかもまるく俗にわ

ぶねねしいもて和素羅珥よのこゝぐも 万葉二十に

和須良牟砥などあり此ハ第一の書らよりむむのてはを

はを受るハ図のぬく四段の活にかぎれり此詞も中首より下

二段の活きにのこいへり古事記にハ妹ハ[illegible]世のこもく

にとあり かくてまて下二段の活なり

○ほぐかまる 枕草紙におぐかまりとあり

○をこぼる 日本紀に誘聚源氏若菜にをこぼりとらむ

の心にて演松中納言物語にをこぼりなどありさて此俗中ハ

日本紀にほうつるとも訓されぞこゝにいぶしつ

○やちまゝ下

○をぜる日本紀神武巻に望見又睨などよみたりおを定め
がたし暫ク日本紀の假字ばけりによりてこゝに出せり
○万葉十三にしたち花の末枝乎須具里又十四にはぎねらハゆ
十五に羽具久毛流又宣命に部ゝ志まりなどなるハさぎねらひ
たぐもはゝ志みを延るのこゝにてこゝ此活詞にあらぐこゝ
万葉十三の歌同し嵩ノカミにも出たりそこにそ橘のたつえを過而
とあり此例上に見たれりまたあり其處にはいくるが如し
○まぢて四段の活の才四の意より さたらん さたり さたる
さたれ おもへらん おもへり おもへる おもへれ こそらん こそり
こそる こそれなどらりるれとうくるく全くこゝ此活き

ざり肌りはまど活詞にはあらくるてにをハの活きたるなれ
ぞこゝの活詞の列にあらぐ此よし三巻のはしゑりにもいへ
わさてこれを万葉に咲有立有思有などに有の字をそへて
かゝれてそれ意なれぞうくるてにをはもしよいへるぬ
こゝなりとありとも此くいふにあらしし

中二段の活詞

此るゝを俗言にハ出るといふ例なり
おるゝ　こるゝ　○ふるゝ　ゆるゝ
○ふるゝ古今集悲にふるゝ ふるれバおもふ事なし 後撰集
雜にふるゝ身ハなこゝの中に云く 蜻蛉日記に二人の活心のうち

ふかぐかなしはどあり

下二段の活詞

此るゝを俗言にまるといふ例なり

あるゝ　○あがるゝ　あまるゝ　あくがるゝ

○あぎるゝ　あぞるゝ　あふるゝ　あくはるゝ

いるゝ　いとまるゝ　いらるゝ　うかるゝ

うくるゝ　うぞくるゝ　うまるゝ　うもるゝ

おのるゝ　おくるゝ　おそるゝ　おそはるゝ

おとぶるゝ　○おぞるゝ　おぞるゝ　○おそどるゝ

おぞゝるゝ　おもはるゝ　かるゝ　かくるゝ

○かぐるゝ　○かぶるゝ　かくはるゝ　きるゝ

きらるゝ　くるゝ　○くるゝ　くぐるゝ

くぐをるゝ　けおきるゝ　けがるゝ　けくるゝ

げどらるゝ　こがるゝ　こがるゝ　さるゝ

さそはるゝ　しるゝ　しるゝ　しぐるゝ

○しぶるゝ　しのばるゝ　しかくるゝ　しくるゝ

しをるゝ　しのぐるゝ　しぐるゝ　しくるゝ

○しみやのるゝ　せかるゝ　○そるゝ　○そかるゝ

しるゝ　○しらるゝ　○しぐるゝ　しぞくるゝ

しまるゝ　しはふるゝ　しふるゝ　はるゝ

法りるし　法ぶるし　なるし　なぶるし
なぶめらるし　なくしまるし　ぬるし　ぬらるし
のぶるし　たるし　たれるし　たれるし
○たふるし　ひのるし　ひしるし　ふるし
ふしくるし　ほるし　まぎるし　ましるし
まどひるし　まぬかるし　○まみるし　こぞらるし
○むるし　むつるし　むほがるし　むまだらるし
ゑんかるし　ゑんさるし　ゑんなるし　もるし
もよおさるし　○やるし　やほるし　やぶるし
ゆるさるし　よるし　よらるし　○のまたまるし　ひるし

ひのるし　ひほるし　ひほしるし　○ひろぶるし
ともるし　ともしるし

○右は挙しる外四段の活詞の其第一の音よりあれば詠くを
おどろかるし　くしまるを　くしさるし　くむを　くまるし　所ど
活かし又一段の活詞中二段の活詞の其第二の音よりきるを
きしはし　えるを　えらぶし　おくるを　おぎしはし　こふるを
こぴらるし　なと活かし下二段の活詞のその第四の音よりあ
うくるを　うけらるし　いづる子　いでらるし　かがむるを
かがめらはし　かどるし　らるしと活かししるたぐひなれいと
多しこれしくしてもおさぐみなこれ活詞なり

○あぐるし　源氏物語箒木にはかるし所にて空蟬老り
はぐるしけれど所どなれあり
○あぎるし　字鏡に醋魚肉爛也阿佐礼太利とあり
○おびるし　物語文にねおびれなどあるはこれにて外に活きて
ほとりすゑあたらぎれども此活きなるべし
○おれどるし　源氏東屋におれどれしる云々又も書に髮のも
その俄におれどれしる所どあり
○かぐるし　万葉九に舟こぐごとくよりも香具禮（かクレ）とあるかに
見えばれども此活詞なるべし
○かぶるし　和名抄に漆瘡和名宇流之加不禮とあり

○こるし　神樂哥に山人のあれにくれいるやすもおもしぞこまき
物語書などにもこんとたり
○志げるし　散木奇歌集にまるもとおもみまぜれるみきのえ
ぶなれぞけれる小笠に志づれおつ所り同長哥にくぶるみ
なりそ白しへの雲に志ぎまとあやすれ丹後守為忠家
百そに仲正朝まぐ見拾のうたまふの雲にそうんまを日かぎきし
こぞ志げれもぞけるなどあり又綺語抄におしくや尸乃
志づれ志しのそでなれやおもひのかにぬれぬとおもへぞ
四条大納言この枕に本にふかゆるまのおほるをいふ所りと
あり これも同し詞ときこしたるを志づれとて八四段の活

はまれりかくも活く例のやからのなんあまたみゆ

○きみやかるゝ　詞花集恋にいつしかゆきのきえてみやかれ活く
とあり　速に炭焼きをかけけり

○そゝかるゝ　夫木集灌の部にそゝかれぬまでぞなりぬる

○そぼるゝ　狭衣一にわくらひそぼるゝけそひと侍りまへく
今撰和歌集に為真入道うぐひすの梅の花がさぬれ
ずふるまち雨にそぼれてぞ形くと書きあり

○しころゝ　古事記上巻に宇士多加礼とあり　俗言にハしころめ
と四段の活用にいへり

○しぐるゝ　古事記上巻に血爛をちあえうじれるとあり

○たふるゝ　源氏夕顔にはふれぬ院にとあり

○まみるゝ　日本紀神代巻に血塗をまみれたりぞなめみてき
千載集にまみれてふなどあり

○むるゝ　丹後守為忠家百首に為盛いそぎて帰るもむるゝ
これかれなどあり　もれとハつねに多くいへり

○やるゝ　神楽歌に袖こそやぶれあれく

○ころぶるゝ　物語書にころびれといへるのみにて外に活き
これすみえあやつまれども此活きなるべし

○よみたまうて　枕注　大なる木の風にふきたふされて根をさゝげて
たふれぬふせる　コノ詞常ニハ　ナド行四段ノ

和行之圖

并受るてにをはの図

一段の活	中二段ノ活	下二段ノ活
居(キル)	率(ヒキウル)	植(ウヽル)飢(ウヽル)
ゐ	ゐ	ゑ
まんぬじでぜ	まんぬじでぜ	まんぬじでぜ
しるけんりて	しるけんりて	しるけんりて
ぬるなきつ	ぬるなきつ	ぬるなきつ
ゐる	う	う
ととらしべきらんめり	ととらしべきらんめり	ととらしべきらんめり
	うる	うる
よめをふまでかな	よめをふまでかな	よめをふまでかな
ゐれ	うれ	うれ
どもぐだ	どもぐだ	どもぐだ

○此行にて四段の活詞解し

一段の活詞

ゐる 居 ○用ゐる

○和名抄に艘ハ俗云爲流舩著沙不行也又斷此間云波井流齒傷酢也などゐるハ同きり又同きりにて異なるゝ又そ羅行の四段の活詞にて ゐらん ゐり ゐる ゐれと活く詞から活きて

はとゝるんゝばまでぞいづれとも定めがたし

○もちゐる 古れも持率乃二合ゐ其ハさゝ乃一段乃活きるゝまゝと疑ひ

もちひ 土佐日記考証 下ニ手ニ乃ふをもちゐ れバ魚もちひぞ

中二段の活詞

此うるを俗言りにハゐるといふ例なり

○うる ○ゐきうる ゐきうる

○うる物語書りにゐてきるなどいくるとゝ多しこれなりかゝ

○やちまゝ下

率ヲひきゐるトヤウニ活カシタル例ナレ然レバコノ語ヲ上ニノ活語トセシハ誤リナリト黒川先生云レキ

黒川先生又曰ク思ふ結ふるナドノふハワノ本ヲ按ズルニ平家物語太平記ナドニ引連ヲひつれトヱ又物語書ニ引提餞ヲひさげト省キ呼ブ如ク思ひ結ふるトヱベキヲ思ふ結ふるトヱシテニヤ思ツトヱヘバソノ間ニオノヅカラウトヱヒヤガテソレヲナズメテカニ思ふ結ふるトヱシ如ク古ノ人ハふトワノ差別ヲ知ラザルユヱニふノ音ヲ含ムニ非ズヤ レカルヲ用ヰタルモノカニ按ズルニモ行四段ノ連用云ヨリテトヱ辞ニツヾリ今ハ俗言ニハミナひノ音ヲ促メテ呼ブナリ思ひてヲ思ッテノ類ナリ然ルニ文章ニ書ク時ハ思ッテトハ書キカタキユヱ今ノ世ノ人ハ思ふてヲ思ふてナド書ノコトナリコレニヨリテ先生ノ流疑トセレ同ノ格ヲフレテス人ハ思ふてハ思ふてナド書リナドヨリテ老フレバ今ヲ按ズルニ商人ヲあきうどナド云ハあきひどト呼ブきまりひニウツル間ニオノヅカラウノ聲アルユヱソノ出スベキひノ音ヲ出サズシテアノ出ル易キんト音ブ音ヲ出レタルモコレヲ按ズルニ物ニハ書キカヌルト覚ユル本リナダラカヌノんノ離ナル字ヲ書クコニナレルナリあきうどナド書ク本ハ俗呼ノあきんどト云フガ本ナルベキ

ニノ音ヨリウツル音ヘウ音ナル詞呼ブニハ少ノ如クスベキカ後世ニテ書ヲ黒川先生説

ソリ例ハ思ひ結ふる音ニ轉ズルハ例ア

うゝる　うれなど活ざるとゑべくされどもこの活と見るべけはて
これをひきゝるの意にて暑きをかくる詞と歌もふさしぶべし
なれ　綴り物語文

一段ノ活

○うゝる　字鏡に鐖ハイヒニウ。伊比尓宇くと訓り猶うゑとはくる意し

○うゝる　飢

○ひゝる

○うゝる　植

○くゝる　蹴

○をゝる　居

○うゝる　伊勢物語に志きうゝともたえくあらなハ猶寄し

○くゝる　古事記上巻に蹶散（クヱハララカシ）又蹶離（クヱハナチ）日本紀に蹵散此云倶穢（クヱハララカス）。。蹴邏く箇須などゝあり於て和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあり同し詞なるをかくいひても也行の下二段の活りにて假ま（な）も異なり此ゝ語ちゝやくる活めゝるりや

○をゝる　玉衡集にいゝなれぞ大内山のそゝきく今ハ亂ゝてその閑を濡ゝらんとあり是ゑとゝゝる八寄し

○ひゝる　古事記中巻にこゝき斐恵泥（ヒヱネ）とあり此詞初に活きたるとあゝなんゝぎれども第四のきるより祢とゝゝる八下二段の活の定まり彩りさて和名抄に竹刀ハ阿平比衣と訓れ是本ハひと

奉ヲひきうるトヤウニ活カシタル例ナレ然レバコノ語ヲコヽノ活語トセレハ誤リナリト黒川先生云レキ

白井寛蔭云コハ突星ヲ約メテ引トナヘルニテ雲霧ヲ挙げト云如ク約メタル上ニテハ一ツノ体言トナレルナリ

日本紀ノ文ヘきぬ古ハ云ハ上ト讀ズ此ハ解レガタシ則ハ古書ニハ必ズ連用言ヨリツヾク語ナリ然ルニ急居ヲ活ク語トシテ断止言トスレバコノ文章解シカタキヲヤ 黒川先生

うゝる うれなど活ることもあらざれどもこの活とみるべきにはて

これをひきうるの意をもて暑きたる詞とおもふそこなぐめ

ひきうるハ此詞をひきといふことをそへていへるなめ

○ほきうる 日本紀崇神巻に急居此ヲ云菟岐子となり 物語文

急居ト云ハ膝ヲツキテ踵ヲ以テ尻ヲ支ヘ 正シク下ニ居付セヌヲ云ナリ

○ほきうるに 愛俳迹々姫命仰見而悔之急居 急居此云菟岐子 則撞陰而薨コレハつきゐ轉ナリソ例ハ思ひ孫ふる

又思ふ孫ふるト云ヒ あきひてヲあきふとト云ニ同ジ則四ノ音二ノ音ヲ三ノ音ニ轉ズルハ例ナリ

又思ふ孫ふるヲ思ふ孫ふるナリト云モ非ナリ古書ニハミナふト出タリ但シ呼フニハ引ノ如クスベキカフ

後世ニ引ヲ書モヨロシ 黒川先生説

下二段の活詞

此うるを俗言にハ忘るといふ例なり

○うゝる 飢

○うゝる 植

○くゝる 蹴

○まゝる 居

○ひうる

○うゝる 字鏡に饑ハイヒニウヽ伊比尓宇くとあり狩うゝるといへる多し

○うゝる 伊勢物語に志まうことばにきくものならバ狩多し

○うゝる 古事記上巻に蹶散又蹶離 日本紀に蹵散此云倶穢

皺邏く箇須などあり此て和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあ

り同し詞なるをかくいひてそ 也 行の下二段の活にて假ま

も異なり此ことをもやく誤りなるなや

○まゝる 種衡集にいるなれば大内山のそこまでかゝれ風てそ

の関をあらしんとあり まゝるといへるハ多し

○ひうる 古事記中巻にこきて斐恵泥とあり此詞に活き

たることあらんとぞれども第四のまゝよめ祢とこゝるハ下二段の活

の定まり所りさて和名抄に竹刀ハ阿乎比衣とあれば其ハひと

○やちまゝ下

つくれのうたどもおもひまがへるに假字のちがひたるなどあまた
よきことなるらむや
[安]行よりはじめて右に挙たる詞どもも猶さまざまに活きてかはり
用ゐらるれどもおもひ出つるにまかせてかつがつしるせるなればこの
ほかにもれたるもおほかるべし それはまたのちにひろひて考ふべきわざなり

文化三年春三月

詞のはたらきかたのことは。歌よむにも。文かくにも。法のに書見る毎に。ふとの
くはしく見て。しるいのへきまでは。しる
いのへありけりかし。よくこころえつは
人も。まなぶへきぬし無あらさるへけ
きと。おもふにみてもくし。或もいまる

花ろく毎見志らぬ人れ。何くれのこと。よ頁
いて。かゝ満たしかゝ思ハむ。さし何らわ
てハ。思ひもまとひ。又ハ何かなくもて花
のもることも。安へ可免れハ然て。春庭。
此ひかゝ勢ふるとせ。これ今の書と海
人ハ然きてうせなとするついてそ。これら

志るへ然。引いつへき詞とも。清みいてお
きてるうへハ。猶よく考へ正して。古迹ハ。
そのはらう記。こ社ハ。単孔然ることなり
なと。抄見さるめて。うれ頌よみ。ふ頁
かく人れ。毎世ちくさせまつへう物し
多るなり。猶ひきもらし。かむうへおよ

はぬもあらむち。此やちまるはちちゝ
ふ家ゝへて。れきまへてよあし。

本居大平

文化五年戊辰之春發行

製本弘所　書林

江戸白銀町二丁目
須原屋善五郎

大坂心齋橋筋唐物町
河内屋太助

勢州松坂日野町
柏屋兵助

京都三條通柳馬場東之町
錢屋利兵衛

同　御幸町通御池下ル町
菱屋孫兵衛